

2011. 3. 30.

今回は、がらりと趣向を変えてある男性の、夢の記録、より正確に言えば、夢と思い出を中心にした一種の自伝的記録(もしくは自伝的創作)とそれに関する筆者の解説を紹介したい。彼は、この「夢の物語」で、自己治療を試みようとしており、それはそれである程度の目的を達していると同時に、その物語そのものが素晴らしい文学作品になっている。

1. 「夢と人生」 解説の目的

a. 「夢と人生」について

取り上げる作品は、19世紀フランスの作家・詩人であるジェラルム・ドゥ・ネルヴァル(1808～1855)の晩年に書かれた「夢と人生」(別名オーレリア)である。

彼は、1841年1850年前以降に、度々精神病の発作に襲われ、何度も入院を繰り返している。ある時、ネルヴァルの主治医であった、エミール・ブランシュ医師はネルヴァルに、治療の一環として、自分の夢を記録することを勧めたらしい。彼は、忠実に従い丹念に自分の夢の記録を行い、それが発展して「夢と人生」という素晴らしい作品を生んだ。

b. 作品解説と紹介の目的

今回、筆者がこれを取り上げようと思った理由は、①「夢と人生」の中には、余りに素晴らしい霊夢といったものが多いこと、②ネルヴァル自身が夢と言ったものについて重要なことを記していること、③作品解説を通じて、夢の持つ意味、夢の治癒力といったものの理解が深まること、と言ったことが主なものである。

ただ、いささか本音を言わせて頂ければ、筆者にとってネルヴァルは18歳ごろからの愛着詩人で、彼を通じてフランス文学やフランス語の世界に入り込み、おまけにフランスに二度も滞在する機会を与えられた恩人でもあった。そして、いつの日かネルヴァルに関する自分の思いを纏めたいと機会を待っていた。そして、最近、夢の中でユングから、「そろそろネルヴァルについて何か記すように」と言われたこともあり、この治療ゼミの紙面をお借りして、まずは、ネルヴァルの夢の世界を解説してみようと思った次第である。

2. ネルヴァルの生涯(成育歴・病歴・活動歴等)

a. ネルヴァルの紹介

ネルヴァルといっても、そんなに知られている作家ではないので、簡単に略歴を紹介しておく。

彼は、1808年にパリで生まれたフランスの詩人、小説家、劇作家、ジャーナリスト、である。幼くして母を失い、北フランスのヴァロワ地方で育つ。1827年、ゲーテ「ファウスト」の翻訳で文壇にデビュー。ロマン派の闘士として活躍。41年、最初の精神病の発作が起きた後も、50年ごろから度々発作を繰り返したのち縊死。

作品はヴァロワの風物を背景に現実、夢、狂気が錯綜した幻想的世界を描き、20世紀に入ってから

ら、ブルーストやブルトンらに高く評価され、「シュールレアリストの先駆者」とも言われている。ユングもネルヴァルについての小文を書いており、日本においても近年注目が高くなり、二度にわたって、ネルヴァル全集が発刊されている。

b. ネルヴァルの年譜

ざっと以上のことを頭に入れた後、今度は、年表風に彼の生涯を辿ってみよう。夢の解説には、過去や現実の生活状況を知ることが必須であるからである。以下は、「夢と人生」を解説する上で知っておいた方が便利なものに絞って、年譜を作成した。

1808. 5. 22. パリで生まれる。父は医師、母はネルヴァル出産後、ナポレオンに従って従軍する父と共にドイツに赴き、1810. 11. 29. に、シレジアで亡くなる。(＃母を見ることもなく育ったことは、彼のその後の生涯にかなりの影響を与えたと思われる。アニマ探究)

ネルヴァルは、モルトフォンテーヌの大叔父アントワヌ・ブーシェに預けられる。このモルトフォンテーヌを中心とするヴァロワ地方や神秘主義思想に詳しい大叔父の影響は、「夢と人生」にも出てくる。

1821 年、この頃より詩作を始める。

1826 年、初めて詩集を出版。

1827 年、ファウスト翻訳(ゲーテ「この仏訳を読めば、原文のファウストを読む気がしない」というほど激賞)で名を知られるようになる。(＃このファウストは、「夢と人生」の冥界下りに影響を与えている)

この頃より、詩、小文、評論、記事、劇作などを発表。多くの文人、音楽家、芸術家と交わるとともに、医療活動にも従事。また、政治活動にも参加し、投獄されたこともある(＃ネルヴァルは多方面に活躍、というかあちこちに手を出し過ぎてこれが精神病の引き金になった可能性もある)

1834 年、祖父の莫大な遺産が手に入る。この頃より、各地に旅行に出ること多し(ネルヴァルには「東方紀行」「ローレライ」を初め、優れた紀行文が多い。「夢と人生」にも、旅行の体験が数多くでてくる)

この頃、女優ジェニー・コロンの恋し、彼女の礼賛のための演劇誌を創刊、莫大な赤字をだし、遺産を使い果たす(＃こういうのめり込みというか、現実感覚の無さも、精神病の要因になったのかもしれない。ただ、この J. コロンはソフィー・ドースと共に、オーレリアのモデルとなったと思われる。オーレリアについては、後で詳しく述べる予定。ネルヴァルの現実認識の無さは彼を困窮させたが、一方で夢の扉を可能な限り開かせたとも言える)

この頃より、ドイツ、オーストリア、ベルギーなどに旅行頻繁(＃1840 末にはブリュッセルで、J. コロンと再会。これは「夢と人生」の冒頭にてでてくる)

1841. 2. 20 最初の狂気の発作(幻覚、妄想、錯乱、躁状態が主であったようである)を起こし、ある病院に収容される。退院後、すぐに発作がぶり返し、今度は、3～11 月まで、エスプリ・ブランシュ病院に入院し、手厚い精神療法を受け回復(＃この息子のエミール・ブランシュ医師が、後年、ネ

ルヴァルに夢と病的体験を書くように勧めたとのこと)

1842.6月、J. コロン死去。同、12月オリエント(東方)旅行に出発。パリ→マルセイユ→マルタ島→シロス島→アレクサンドリア→カイロ→シリア→バイルート→キプロス島、ロードス島、スミルナ→コンスタンチノーブル→シロス島、マルタ島→ナポリ→南仏を経て、1844.1月にパリに戻る(ネルヴァルは、先述したように、旅を頻繁にして、また良質の紀行文を残している。「東方紀行」はその代表的なものである。ネルヴァルは土地の力、土地の霊、さらに言うなら土地にしみこんでいる夢を引き出す天性の才があるのかもしれない)

この後、再び、執筆、旅行、交友など活発に動くが、1848年末は経済的に困窮していたとの事である。

1850年、劇の上演がうまく行かないことが多く心労が多かったようで、体調不良もあって、短期の入院をしている。同年、11月には、妄想めいた手紙を書いている。

1851.4月過労から体調を崩す。同年9月、階段から落ちて怪我。

1852.1月、劇作「ハーレルムの版画師」が興行的に振るわず、抑うつ状態になる。丹毒で入院。2月に退院後、精神的に不安定ながら、執筆活動が続ける。

1853.2月、発熱のため短期入院。同年8月、精神病の発作のため、エミール・ブランシュ医師病院に入院。完治しないまま退院。すぐ再発して再入院。入院先で仕事を続ける。(＃この頃より、エミール・ブランシュ医師の勧めで夢の記録を取り始め、それが「夢と人生」に結実している。また、この時の入院体験も同作品の中に記されている)

1854.5月、強引に退院し、ドイツ旅行。再発して8月再々入院。同年10月、エミール・ブランシュ医師の反対を押し切り、退院。

1855.1月、住所不定でさまよった挙句、1.26縊死体で発見される。

以上、簡単な紹介と年譜で終えておくが、読者はこの短い紹介で彼のことをどう思っただろうか？「夢と神秘と霊的世界の勇氣ある探究者」と見るか「単なる生活破綻を来した精神病患者」と見るか、また「驚くほど多方面への才能に満ちた芸術家」と考えるか、「纏まりのない駄作を大量生産しただけ」とするか、評価はいろいろであるが、それは、この連載が終わった所に聞かせてもらえたら有り難い。といっても、ネルヴァルの懐は考えられないほど深いのでいつ終わるかわからないが切りのいいところで片を付けるつもりではある。まあ、そんなことはともかく、早速「夢と人生」の世界に分け入っていこう。

3. 「夢と人生」第1部第1章

a. 夢は第2の人生

ア、夢と「再帰」

冒頭にいきなり「夢は第2の人生である」と来る。これは、現代の我々、特に心理治療や夢に関心のある者にとっては、当然であったかもしれないが、当時の人々にとっては「狂人のたわごと」と映ったかもしれない。

しかし、フロイトの「夢判断」より 50 年近くも前に、こういうことを明言しているのはすごいことだと思われる。ただ、夢はフランス語で *revê* ということで、これは *revoir* (もう一度見る、思い出す) と関連し、またラテン語の *revertor* (回帰する、戻る) を語源にしていることで、語源的には「人生を再び見る」「あの人生に再び戻る」ということで、自然なことなのかもしれない。

イ、症状は「第 2 の人生」

「再帰する」ということから言えば、第 1 の人生は、常に第 2 の人生として戻ってくる可能性を秘めている。例えば、患者・クライアントの持ってくる症状や問題点などは、第 2 の人生の一つの象徴ではないだろうか。第 1 の人生の中で、人々は様々な希望や欲求を持たされる。これはもちろん満たされるとは限らないし、その欲求不満・充足不全は、心身の症状として、現れる場合がある。その時、「第 1 の人生」は、症状と言う形を通して「第 2 の人生」として再帰するのである。

症状に直面して、患者は苦しみ、動揺するが、実は、それは「症状という「第 2 の人生」の解明が重要である」と言うことを告げに来てくれているのである。患者は、症状の除去をすぐに望むことが多いが、問題の根が深いほどそれは無理なことが多く、むしろその解明をすることで第 2 の人生の意味がはっきりし、それが再び「第 1 の人生」に再帰するということで、第 1 の人生はより豊かになるのである。

夢は、症状ほど人間を苦しめるものではないが(ただし恐ろしい悪夢は例外化も)、重要な夢は後々まで気になるものである。従って、夢も症状も、夢見手や患者に解明・解説といった謎解きを要求する。それ故、治療や夢分析といったものは、患者と共に「共同の謎解き作業」と言ってよい。あるいは、症状や夢を出発点とする、共同のアクティヴ・イマジネーションと言えるかもしれない。症状というとネガティブな印象しか持たない人が多いが、それが第 1 の人生の硬直性を打ち破るものである、と捉えた場合、「症状にも夢を見出せる」として、症状の相対化、症状の苦痛の軽減に寄与するかもしれない。

ただ、目に見える「第 1 の人生」を、「第 2 の人生」として夢と言う形で再体験したとして、それをどう使うかは、夢見手次第である。ネルヴァルの使い方はどうだったのであろうか？

b. 象牙の門と角の門(夢の真実と嘘)

ア、正夢と逆夢

ネルヴァルは続いて「目に見えない世界(夢や霊の世界)と我々を隔てている象牙の門、あるいは角の門を通る時、私は必ず、震えにおののくほどの戦慄を覚える」と記している。

象牙の門や角の門というのは、ホメロスの「オデッセイア」やヴェルギリウスの「アエネイス」にでてくるもので、共に「目に見える現実世界」と「目に見えない夢の世界」の境にある門である。この門を通して、夢が現実世界にもたらされるのだが、象牙の門を通る夢は、偽りの夢であり、人を惑わせる幻影であるのに対して、角の門を通る夢は、実際にその通りになる夢で、真の啓示を伝える夢とされている。

いわゆる正夢(夢で見た通りのことが起こるという夢)と逆夢(事実とは逆の夢。実際には逆のことが起きる夢)のことに相当するのであろう。いずれにせよ、この二つの門の話からは、人類が古代から(というより古代では特に)夢や「夢が当たるかどうか」に特別な関心を払っていたことが窺い知れるようである。古代は、神託でもって、国家の重大事までを決定していたというから、神託の一つである「夢判断」「夢占い」が非常に重要視されたのは当然かもしれない。

イ、夢が当たるとは？

ただ、「夢が当たる」というのは、どういうことだろうか？単純に考えれば「金持ちになる夢」を見た人が、実際に大金を得たり、「山で遭難する夢」を見た人が、お告げを聞かずに、山に登り転落死するというのが、正夢ということになるのだろう。

しかし、ことはそう単純ではない。例えば、金持ちの夢を見た人が、その一週間後に宝くじで1億円手に入れたが、1か月間の内に、遊行や賭博にふけり、気が付いたときは財産を使い果たし逆に1億円の借金を背負い、その後の30年を困窮の内に送ったとした場合、これは正夢だろうか逆夢なのだろうか？逆に、金持ちの夢を見てもそんなことには惑わされずに黙々と働き、いつのまにか大金持ちになっていて、しかもそれで散在するということなく、日々の働きを楽しみとして悠々と人生を送った人がいて、この夢は正逆のどちらにはいるのだろうか？

墜落の夢も同じで、お告げを信じてその後一切登山をしなかった人が、自分の唯一の趣味を奪われ、その後全く張りの無い、それこそ「墜落した人生」を送ったとするなら、これは正夢なのだろうか？逆に「墜落夢」を見たがそれに反抗して、十分な計画と装備と細心の注意を払うことで、墜落しそうな危険に会いながら、結局は全世界の有名な山を制覇して満足な一生を送った人の「墜落夢」は正夢なのか逆夢なのだろうか？

こういうふうと考えてくると結局、正夢、逆夢といっても、要は、見た夢を如何に活用するか、その夢の力を如何に引き出すかということになるのだろう。

そうだとすると、正夢・逆夢の区別や、象牙の門や角の門の存在は無意味となるのだろうか？それは、そんなことは無いのであって、夢を生かすための方便としては大事なのである。

ちょうど、真実と嘘の境目が曖昧(例えば「嘘から出たまこと」「嘘は真実に至る一つの道程」といったこと)なのと同じなのかもしれない。いずれ、正夢・逆夢の本態や、「真実とは?」「嘘とは?」について考察する時が来るだろうから、その時の宿題にとっておこう。

いずれにせよ、夢の門を潜る時に、ネルヴァルがものすごい戦慄を感じたというのは、それだけ夢の世界の豊富さだけではなくその世界の恐ろしさ十分に味わわされていたと思われる。

c. 入眠時の様相とリンボ(辺獄、辺境)→精霊の世界への開け

次は少し長いが全文を引用する。「眠りに入る最初の瞬間は、まさに死のイメージと言える。即ち、どんより曇ったような麻痺やまどろみが我々の思考を捉えるので、ぼーとした状態となる。従って、我々は、自我が別の形で、存在し続ける、決定的瞬間と言うものを捉えることが出来ない。やがて、茫漠とした、おぼろげな地下の世界に徐々に光が差し込み明るくなるにつれて、影と闇の中

から、青白い像や姿が浮かび上がってくる。それらの像は天国と地獄のリンボに住まわっているかのようなものである。続いて、そのぼんやりした像が徐々にはっきりした姿になり、新たな光が輝くと共に、その光によって奇妙な幻影や幽霊たちが出現してくる。——このようにして「精霊たちの世界」が我々の前に開けてくるのである。」

ア、眠りと死

ここでは、夢の門を潜った後の「精霊の世界」への開けが記されている。

その世界への参入として、最初は眠りが必要であるが、ネルヴァルが「睡眠の最初のイメージは死である。」と書いてあるのは、こぐ自然な感想であろう。何故なら、睡眠とは、まさに無活動的になることであり、無活動の極は死である。

ここで、筆者は、いつもの癖として臨床的事態を思い出す。それは不眠と言うことだが、要するに「眠れなくて苦しい」と訴えている不眠患者の『不眠の原因』は、死を恐れているためである。死の恐怖は誰にでもあるが、不眠患者に特に強く出る印象を持つ。特に強く出るのは、彼らの欲求や生への執着が過剰すぎるからである(執着をコントロール出来ていないと言ってもいい)。その強すぎる執着の結果、心は絶えず不安になり、脳は興奮して、疲れているにもかかわらず、眠り(一時的な死)に移行できないのである。

言い換えれば、「まあ、いいっか」と思っている人は、いつ死んでも大丈夫と言う覚悟が自然に出来ているようで、かれらは執着・不安の少ない「安らぎの状態」になりやすく、したがって眠りへの移行もスムーズなのである。

では、どうやれば執着を少なくしたり、多すぎる執着をコントロール出来るのだろうか。それは、おそらくは、日ごろから「したいこと」「できること」「有益なこと」を目指し、しかもその結果に関してはかばかし無くても「とりあえず、これだけやった。まあいいっか」と満足し、そうした自分を肯定的に評価し、未達成の部分は、「まだ生きる目標があるので良かった」と考えることであろう。

しかし、これがこぐ自然であると同時に、至難の業であることは、治療者であればよくわかるであろう。

ただ、ネルヴァルは不眠と言うことはあっただろうが、不眠症ではなかったと思われる。むしろ、現実よりも夢への執着が強かったようである。その夢への傾倒も、現実の生活はしっかり守りながら夢を鑑賞するといった安全を望む人に比べて、はるかに強いものがあったように思える。

ここで、ネルヴァルがもし現実生活も重視する夢見手だとしたらどうなるのだろうか。夢は陳腐なものになる、いや現実との交流で一層夢は豊かになる、どちらでもなく夢そのものにあまり変化はないなど、いろいろな答えが出てくるだろうが、とりあえずこれも宿題にしておく。

イ、夢自我としての存在継続

睡眠が死のイメージの如く、思考も麻痺したようになるが、自我は別の形で存在し続ける。いわゆる夢自我とでもいうべきものだろう。普通、夢の中は無意識だけでエスの世界だけだと思われが

ちであるが、そんなことはなく、夢の中でもそれなりに自我も超自我も存在する。ネルヴァルのように、夢に傾倒していると、その夢自我の働きもすごいものだったのかもしれない。

興味深いのは、「自我が別の形になって存在し続けるその瞬間を決定できない」という件である。瞬間を決定するのは、覚醒自我(現実自我)だから、夢自我に代わった瞬間、現実自我はなくなるわけで、その変わった瞬間を捉えることは不可能に近いと思われるが、ネルヴァルはそこが興味があったのかも知れない。

ウ、リンボと冥界下り

続いて、「地獄のリンボに居る像」の件が出てくるが、このリンボとは、キリスト教、特にカトリックという所の辺境(辺獄)のことである。つまり、地獄の辺土であり、古聖所(キリスト以前の正しい人の霊の住むところ)、孩所(洗礼を受けていない幼児の住むところ)、冥府でもある。

もっと具体的イメージを言うなら、ダンテの神曲の中で、地獄の門を潜ったダンテがリンボに住むウェルギリウス(正しい大詩人だが、未洗礼者であるため、リンボにいる)に案内されて、地獄めぐりをする箇所になる。ここの所は後で、また、触れる。

いずれにせよ、眠りについてからの夢の最初の像が、辺獄の亡霊たちであるということは、ネルヴァルにとっては、夢体験が一種の冥界(地獄)下り、死と再生の道行ということになるのだろう。

こうして、精霊達(E s p r i t s)の世界が開けるのである。

(少し付け加えると、この睡眠の最初の瞬間、死のイメージ→思考麻痺→夢自我→徐々に明るくなる→リンボの亡霊の出現→その姿が明確になり、動き回る→精霊の世界の開けという一連のシーンは、何か治療作業の一つの局面を現しているように思えた)

d. 冥界下りの先達者達

続いて、精霊世界の探究者たちが紹介される。そこのところをネルヴァルは「これらの精霊たちの世界でみたことを、スウェーデンボリは「Memorabilia(記憶すべき事柄)」と呼んだが、彼の場合はそれらのヴィジョンを、睡眠よりは夢想から得ている。またアブレユスの「黄金のロバ」やダンテの「神曲」も、人間の霊魂に関するこうした諸研究の、立派な詩的モデルである」と記し、自分も彼らに倣って、自分の諸経験(特に精神病の時の)を書き写すことで、自分という人間の魂の探究に乗り出そうという決意を述べる。

ア、スウェーデンボリ(1688～1772)について

彼は、スウェーデンの科学者・政治家・神秘思想家であり、「天界の秘儀」「メモラビリア」「真のキリスト教」などで、自らの霊的体験や霊界での見聞記を記している。彼の夢日記も特筆ものである。

イ、神曲における冥界(地獄)下りと煉獄、天国

有名な、ダンテの神曲も一種の冥界下り、精霊世界の巡礼と言える。ネルヴァルのこの「夢と人生」も一種の冥界下りということ述べたが、ファウストと同様、この新曲も相当、ネルヴァルに影響を与えている。

神曲の冥界下りはどうなっているか、有名古典の再復習も兼ねて、神曲の内容をざっと見てみよう。

まずは、地獄篇である。出だしは、主人公であるダンテが、人生の半ばにして暗い森に迷い込んだダンテが、地獄に入り込んだことから始まる(一種の中年の危機とも言えるだろう)。

とまどい迷うダンテを導くのは、先に出てきたローマの大詩人ウェルギリウスであり、彼の導きによって、地獄の門を潜り、冥界下り(地獄巡り)を始める。

地獄の門(「この門を潜る者は一切の希望を捨てよ」との銘が刻まれている)の後には、地獄前域(無為に生き善も悪も為さなかった亡者のいるところで、彼らは蜂や蛇に刺される)に行きつく。以下アケローン河(渡し守カロンが亡者を地獄へ連行)

第1圏；辺獄、リンボ(洗礼を受けなかったものが、呵責こそないが、希望もないまま永遠に時を過ごす)

第2圏；愛欲者の地獄(肉欲に溺れたものが、荒れ狂う暴風雨に吹き流される)

第3圏；貪食者の地獄(大食の罪を犯した者が、ケルベロスに引き裂かれて泥濘にのたうちまわる)冥府の神ブルートーの咆哮

第4圏；貪欲者の地獄(吝嗇と浪費の悪徳を積んだ者が、思い金貨の袋を背負いながら罵り合う)

第5圏；憤怒者の地獄(怒りに我を忘れたものが、血の色をしたスティージュの沼で互いに責め苛む)ディエテの市(墮落した天使と重罪人が入れられる、永劫の炎に灼熱した環状の城塞)

第6圏；異端者の地獄(あらゆる宗派の異端の教主と門徒が、火炎の墓孔に葬られている)

その後、ミノタウロス(人身牛頭の怪物)とケンタウロス(半人半馬の怪物)に出会い、ケイロン(これも半人半馬の生き物だが、これは人間の家庭教師になるような良き者である)やネッソスの案内を受ける。

第7圏；暴力者の地獄(他者や自己に対して暴力をふるったものが暴力の種類によって振り分けられる)

第1の環(隣人に対する暴力を振るった者が煮えたぎる血の川フレジェトンタに漬けられる)

第2の環(自己に対する暴力。自殺者の森。自殺者は奇怪な樹木と化し、アルビエに葉を啄まれる)

第3の環(神と自然と技術に対する暴力。男色者に火の雨が降りかかる)

第8圏；悪意者の地獄(女衒、阿諛者、沽聖者、魔術師、汚職者、偽善者、盗賊、謀略者、離間者、詐欺師といった10の囊に振り分けられる)

最下層の地獄(嘆きの河、コキュートスの手前には、かつて神に齒向かった巨人が鎖で大穴に封じられている)

第9圏；裏切り者の地獄(コキュートスと呼ばれる氷地獄。そのコキュートスを中心にカイーナの円(肉親に対する裏切り者)、アンテノーラの円(祖国に対する裏切り者)、トロメーアの円(客人に対する裏切り者)、ジュデッカの円(主人に対する裏切り者。ユダに由来)という4つの円がある)

地獄の中心ジュデッカのさらに中心、地球の重力がすべてに向かう所には、神に反逆した墮天使

のなれの果てである、魔王ルチフェロ、サタンが幽閉されている。

ダンテとウェルギリウスは、魔王を踏み台にして、そのまま、まっすぐに反対側の地表にに向けて登り、岩穴を抜けて地球の裏側に達する。そこは煉獄山のふもとであった。

〔ここから、煉獄篇に入る〕

煉獄は地獄を抜けた先の地域に聳える台形の山で、エルサレムの対照点にある。煉獄とは、浄罪、浄化ともいい、煉獄界とは、死者の霊魂が死後至福の状態に導かれるまで、残された償いを果たすためにおかれると信じられる苦しみ状態である。(試練の獄と考えてもいい。なかなか天国に行くのは大変なようである。また煉獄はPurgatorioというが、フランス語のpurgationは浄化、カタルシス以外に下剤の意味がある。その意味では、地獄とは、罪や悪の便がいっぱい詰まっている大便秘状態と言える)

煉獄は、地獄と違って、悔悟に達したものの、悔悛の余地のある死者がここで罪を償う。

煉獄山の構造は、いくつかの段階に分かれ、各階梯で亡者は、生前の罪を浄めつつ上へと昇る。浄め終わると天国へ到達する。煉獄山の構造は次のとおりである。

煉獄前域；煉獄山の麓。小カトーがここに運ばれる死者たちを見張る。

第1の台地；破門者(教会から破門されたものは、臨終において悔い改めても、煉獄山の最外部から贖罪の道につく)

第2の台地；遅悔者(信仰を怠って生前の悔悟が遅く、臨終に際してようやく悔悟に達した者はここから登る)

ペテロの門；煉獄山の入口。それぞれに色の異なる三段の階段を上り、金と銀の鍵を持って扉を押し開く。

第1冠；高慢者(生前、高慢の性を持った者が重い石を背負い、腰を折り曲げる。ダンテ自身はここに来ることになるだろうと述べている)

第2冠；嫉妬者(嫉妬に身を焦がしたものが、臉を縫い止められ、盲人の如くなる)

第3の冠；憤怒者(憤怒を悔悟したものが、朦朧たる煙の中で祈りを発する)

第4冠；怠惰者(怠惰に日々を過ごしたものが、ひたすらこの冠を走り回り、煉獄山を周回する)

第5冠；貪欲者(生前欲深かった者が、五体を地に伏して嘆き悲しみ、欲望を消滅させる)

第6冠；暴食者(暴食に明け暮れた者が、決して口に入らぬ果実を前にして貪欲を節制する)

第7冠；愛欲者(不純な色欲に耽ったものが互いに走り来たり、抱擁を交わして罪を悔い改める)

山頂；地上の楽園(常春の楽園。煉獄でもっとも天国に近い所で、かつて人間が黄金時代に住んでいた場所だという)

天国篇；最初はベアトリーチェで、エンピレオでは、クレルウォーのベルナルドゥスが案内者となる。

天国界の構造

火焰天；地球と月の間にある火の本源。炎が上へ上へと向かうのは、この天へ帰らんとするためと

考えられている。

第1天；月天(天国の最下層で、生前、神への請願を必ずしも満たしきれなかった者が置かれる)

第2天；水星天(徳功を積みはしたが、現世的な野心や名声の執着を断ち切れなかったものが裁かれる)

第3天；金星天(まだ、命あったころ激しい愛の情熱に駆られた者が置かれる)

第4天；太陽天(聖トマス・アキナスら知恵深き魂が置かれる)

第5天；火星天(ダンテの先祖カッチャグイダを初めとする、キリスト教を守るために戦った戦士たちが置かれる)

第6天；木星天(地上にあって大いなる名声を得た正義ある統治者の魂が置かれる)

第7天；土星天(信仰ひとすじに生きた清廉な魂が置かれる)

第8天；恒星天(七つの遊星の天球を内包し、十二宮が置かれている天。聖ペトロら諸聖人が列する)

第9天；原動天(諸天の一切を動かす根源となる天)

第十天；至高天(エンピレオ。諸天使、諸聖人が「天上の薔薇」に集い、ダンテは永遠なる存在を前にして刹那、見神の域に達する)

というのが、神曲で描かれている、地獄、煉獄、天国の構造である。あまりに詳しく引用して、いささかうんざりした向きもあるかもしれないが、実際に、この三界を十分に味わってもらうために長々と紹介したつもりである。

ウ．地獄巡り

神曲の場合は、地獄巡りの後、煉獄を通過して、天国に至るという道程であったが、それ以外にも多くの地獄巡りがある。古くは、シュメール神話のイナンナの地獄下り(黄泉の国下り)から、有名なオルフェウスの冥界下りがあるし、日本ではイザナギノミコトの黄泉の国下りがあるといった具合で、各地各時代で多くの地獄巡りがある。

何故、これだけ多くの「地獄巡り」があるのだろうか？そもそも地獄巡りとは何なのか？筆者は、それが「心の影に向き合い、それを統合し、それで真の安らぎ(天国)に至るという「死と再生」の過程を現している」と考えるし、それは治療過程そのものである。

我々の心は常に、三毒という根本煩惱とそれから派生する多くの随煩惱に意識的・無意識的に苦しみ、それに圧倒されるものの多くが、治療者に救いを求めてくるか、ないしは困った症状や臨床的事態を引き起こして連れてこられるのである。

この三毒、即ち貪(むさぼり、過度の執着)、瞋(怒り、憎しみ)、痴(無知、無明)は、まさに地獄の世界であり、神曲の地獄篇で見たように貪欲者や瞋患者(憤怒者のこと)や無知の人々の世界である。

ダンテのみならず、心の本当の安らぎに至るのは、こうした心の地獄、三毒、影を見つめることが不可欠なのである。

この冥界下りは、また、夢見の過程そのものと言ってもよい。ネルヴァルが、治療のために、夢

や病気の印象を書き記して行こうとしたのもごく自然なことであろう。

エ、黄金のロバ

「黄金のロバ」も同じような地獄巡り、死と再生の物語と考えられる。作者アプレイウス(123～?)は、ローマ帝政時代 i に活躍した人で、ラテン文学の黄金時代を代表する弁論作家で、他に「フロリダ」「プラトンとその教説」「ソクラテスの神について」「宇宙論」などがある。

「黄金のロバ」の簡単なあらすじは、「主人公ルキウスがは、テッサリアの魔術師の客になった時、魔術師の妻がふくろうに変身するのを見て真似をするが、薬を間違えてロバに変わり、盗賊の手にかかり、数々の試練の後に、女神イシスに救われ、人間の姿に戻る」というものである。

このルキウスに関しては、ユング派分析家シュワルツサラントが「境界例と想像力」という本の中で、取り上げており、これは、境界例または自己愛パーソナリティ障害であるルキウスの「死と再生、治癒物語」である、と捉えているようである。

救いには試練が必要と言う、当たり前の命題は、ルキウスだけでなく、万人に共通のものであるが、特にネルヴァルにとっては重要なテーマである。更に、ネルヴァルにとっての最大のアニマであるイシス女神(イシス神)が登場する「黄金のロバ」がこの第 1 章に出ているのもなかなか興味深い。

e. 夢と病的体験の記述

こうした魂探究の先駆者たちの名を挙げた後、ネルヴァルは、次のように記す。

「私も、これから、こうした先達に倣って、自分自身の長期に渡った病気の印象を、出来るだけ詳細に、文字に移し替えようと思う。この病気は、私の魂や精神の種々の神秘・秘密・秘儀体験の中で生じた一切のことである。

ただ、私にとって、疑問なのは、何故「病気」という言葉を使うかである。というのは、少なくともこの私に限って言えば、この病気の最中ほど、自分が元気で快調であると感じたことは無かったからである。しばしば、私は自分の力や活動性が倍加したように思われた。さらにはすべてを知り、あらゆることを理解出来ているようにも思えたのである。想像力が、無限の無上の快楽をもたらしてくれた。

そう思うと、普通の人間たちが理性と呼ぶものを取り戻すことによって、そうした貴重な喜び・楽しみを失うことになり、それらをひどく後悔することになるのではないだろうか」

といった具合である。

ア、「夢や病的体験」記述の治療的重要性(間接化・つながり・理解・安心の良循環)

ネルヴァルが、主治医から勧められて、自分の夢や精神病の記載を始めたことは既に述べた。これは、ネルヴァル自身の意志から出たというようにも記載されているが、それはどちらでもたいしたことはない。それよりもこうした「夢・病気体験」を記すことが何故治療的に有用なのかを考えてみよう。

[間接化]

間接化とは、ある対象に向けての、関心・注意集中・観察・表現といった活動を意味する。これは対象(この場合は「夢・病的体験」)に捉えられて、身動きが取れない、主体に対して、ゆとりと安心感をもたらす。また恐怖や怒りなどへの捉われから、人間を一時解放してくれる(悪夢から覚めたとき「夢でよかった」という体験や、「我に返った」「正気を取り戻した」ということを考えればすぐわかることである)。

そして、観察することで対象がわかり(表現はもっと理解を深める)、主体は安心する。安心感は、待つ能力を増大させ、さらに間接化を促進する。

これは、火(無意識そのもの)の喩えをするとわかりやすい。火はそれに直接触れていると、火傷や火事を起こして、人間や物・自然を破壊する。しかし、それを対象化して、即ち距離を置いて扱うことで、照明・暖房・調理・入浴などに利用できる。即ち、明るさ・暖かさ・美味しさ・心地良さ・リラックスなどを提供できるのである。

別の表現を使えば「情動をエネルギーに変える」という言い方をしてもいい。言語だけでなく、絵画などを使った「表現療法」が有用な所以である。

もう少し言えば、薬(強力安定剤・抗不安剤・抗鬱剤など)は、この間接化に役立っているのである。幻覚・妄想・不眠といった症状、気分、外界、人物など、患者が、そうしたものを間接化して眺めれることで、自由とゆとりを取り戻し、結果として幻覚・妄想が軽減するのである。だから、良い薬とは、なるべく精神機能を落とさず、副作用も少なくして、間接化を助けるものだと言える。この「間接化を促進するもの・妨害するもの」「間接化と薬」は魅力的なテーマだが、これはまたしても今後の宿題にさせて頂く。

[つながり]

患者が、自分の体験したことを語ったり書いたりした内容を、他者(治療者、家族、友人など)に理解してもらえると、患者は自分を受け入れもらった、理解してもらったという感覚を持て、それはもちろん、安心感・安全感・ゆとり・希望などをもたらす。

即ち、他者や外部とつながったということで、孤立感が和らぐ。この「つながり感覚」が、安らぎと共に間接化をまた促すことは、言うまでもないだろう。

[理解・安心]

人間は、自分起こったことが理解できないでいると、いつまでもそれに捉われるだけでなく、過度の異常意識や脱落意識に圧倒され、不安に満ち、意欲や希望をなくすものである。

逆に、自分の体験が理解でき、またその理解を他者と共有できるとしたら本人の安心感やゆとりは回復し、気力や希望が芽生える。

[治療とは、悪循環を良循環に変化させること]

患者は、間接化低下・捉われ・絶望・無気力・精神機能低下・孤立・不安・間接化困難といった悪循環の中にいるが、間接化が可能になることによって、理解・安心・つながり・執着の減少・自由性・希望・意欲といった良循環がもたらされる。

即ち、病とは「悪循環の積み重ねの結果」であり、治療と「良循環に向けての営み」と言えるだろう。

[病的体験記述の危険性]

しかし、この体験記述をむやみにさせてはならない。何しろ火を扱うわけであるから、本人が一人で記していてもそう激しく動揺しないでおれる程の「一定の間接化能力」を回復しているという条件が必要である。ネルヴァルはおそらく、ある程度回復していたのであろう。状態がまだ不安定で、間接化能力が低下している患者にそれをやらせると、火傷(再発)させてしまう危険があるので、十分な注意が必要である。

イ、病気と健康(狂気と正気)

このように、夢・病気体験の記述を試みようとしたネルヴァルであるが、彼は試みの決意の後、「自分の体験を病気としてしまうことへの疑問」「病気の時が一番快調であったこと」「病気が無上の快楽(*des delices infinies*)をもたらしてくれたこと」「理性を取り戻すことによって、こうした悦楽がうしなわれてしまうのではという心配」などを表明している。

[心の病の分類は、病変よりも、結果の現象で決められる]

ネルヴァルの病気が、何であったかは、諸説紛々である。例えば、ノイローゼ、統合失調症、躁うつ病、非定型精神病、癲癇、アルコール中毒、脳梅毒、心因反応、解離性障害などおよそ、精神医学に出てくるオールスター勢揃いといったものが挙げられている。これは、ネルヴァルの病的体験が複雑であるという以上に、精神医学の宿命のようなものである。精神医学とは違って身体医学で扱う身体の病は、背景に、腫瘍・炎症・梗塞・出血・萎縮・変性・奇形などの身体病変に対応するものがあり、死後の病理解剖や生前の身体的検索で明確に診断を付けれる場合が多い。

ところが、心の病に関しては、一対一的に対応する病変が現在のところ、見つかっておらず、あくまで表に結果として現れた現象だけで、命名せざるを得ない。だから、人間の心の特性の片寄・弱点の積みかさねとも捉えられる。いずれにせよ、心の諸現象の現れ方は複雑であり、周囲(例えば治療者)との関係においても、時間的にも流動する(妄想や幻聴が治療者との関係によって増強・消褪することは、精神治療中によく起きる現象だが、癌が治療者との関係の中で増大したり萎縮したりするという話はあまり聞いたことがない)。

従って、一つの病名でくくることは無理があるのだが、なお多数の精神科医は病名にこだわる。それには、多くの要因があるのだが、医学(正確に言えば身体医学)の枠内で、その患者の問題点を理解しようとするからである。つまり、患者の種々の困難・諸問題を医学の中で解決しようとするため、どうしても身体医学の伝統に沿って病名をつけ、分類せざるをえないのである。これには、医師に報告の義務があるということも大きい(診断書などであるが、特にアメリカでは保険会社が厳密な病名付けを要求してくるので、DSM-IVなどの分類が出てくるとも言える。)

[病名の治療的利用]

ただ、誤解の無いようにしておきたいが、筆者は何も「病名付け」が単なる「レッテル貼り」で有

害無益」と言っているわけではない。病名を探ることは、病名を通じて、その患者の問題点を探れることになり、治療の大いなる益になる。つまり、患者の理解と治療に役立つように病名を使うのである。いわば、「病名の治療的利用」とも言うべきものである。従って、病名を付ければ終わりではなく、病名は、今後の治療展開に向けての出発点であり、病名を通じてのアクティヴ・イメージネーションが大事なのである。

もう一つ言うと、病名(または病名らしきもの)を告げる場合は、本人が病名告知のデメリット(その病名に捉われて正しい治療実践が出来ない、悪い方悪い方に考えその病気の本態を正しく理解できない、偏見に圧倒され絶望感・脱落意識・異常意識にとらわれ治療実践を放棄するなど)よりメリット(それを知ることによって一層自分のことや自分の問題点が理解でき正しい治療実践が一層可能になる、正しく理解する結果異常意識・脱落意識から解放される)の方が多いと判断できる時に、考慮していいだろう。また、告げ方にもいろいろあるが、詳しいことは拙著「境界例の治療ポイント」を参照してほしい。

[病気の価値と健康の価値]

ネルヴァルの病名が何かは別として、ネルヴァルは病気の価値を強調している。すなわち「絶好調」「活動性の倍増」「理解力の増大」を感じ「想像力が無限の悦楽をもたらした」と記している。たしかに、ネルヴァルに言われるまでもなく、病気は解放だけでなく、「枠から自由になる」「負担軽減」「立ち止まり内的世界を見る」といった様々な価値がある。

しかし、健康にも価値があるのは当然である。だから、どちらの方がより価値があるかということより、病気には病気の価値とデメリットが、健康には健康の価値とデメリットがあるので、我々はそれぞれ、病気の時は、そのデメリットを避けるとともに、価値を楽しめばいいように思えるが、実際にはそれは至難の業だろう。例えばうつ病になった時、「よかった。これで休息できる」という考えだが、うつ病は、実は「活動も休息も奪われた状態」なので、「休息できてよかった」と考えれるというのは、実は健康を回復しつつあるのである。だから、病気の価値を味わえだせるということは、実はもう病気から脱しているのである。

ここで、ネルヴァルが病気の価値を強調したのは、世間一般の表面的見解や偏見に抗するだけではなく、「夢と狂気」から出てきた、自分のこの作品(夢と人生)の素晴らしさを顕示したかったためだろうと思われる。

「無限の快楽(*des delices infinies*)」などと言われると、読者は「どんな素晴らしいことがまっているのか」と思ってワクワクするだろう。

ただ、ネルヴァルは正気や健康の価値を十分わきまえていて、必要なときには(退院の許可や補助金や執筆の機会を求める時など)「如何に自分が正気であるか」を強調している。その点では、結構現実主義的な点があるようだが、ネルヴァルがそれをうまく使いえたかどうかは、もう少し先になって考察しよう。また、彼が最後に縊死に至った経緯・背景の解明、更には、そうしたネルヴァルの人生を我々がどう評価すべきかといった重大な課題が残る。

いずれにせよ、理性と狂気、正気と非理性の問題は複雑である。出来れば、「狂気や無限の想像力を含んだ『豊かな理性』」を目指したい気持ちだが、その種のものがどんなものか、またそれが可能なかどうかはこれも慎重に考えねばならない問題である。今は、とにかく、先を急ごう。

f. 「新生」とオーレリア

夢と狂気に満ちた、自分の病気体験を語ろうという決意を述べたネルヴァルは「こうした『新生 (Vita nuova)』は、私には、二つの段階・局面あるいは二つの相としてあらわれた。これから、述べることは、その第一相 (第一段階) に関連した内容や覚書である。その覚書は、オーレリア (Aurelia) と呼ぶ女性にまつわる話から始まる。このオーレリアという女性こそ私が長い間愛した人である」と続ける。

ア、「新生」とは?

この「新生」とは、そのイタリア語の原文からしたら、ダンテがベアトリーチェとの愛を描いた「Vita nuova」のことだろう。ダンテのこの作品は彼の処女作であるが、それは昇天したベアトリーチェへの純愛に導かれて体験した神の世界を表現している。ベアトリーチェは神曲でも大きな役割を果たしており、ダンテの大事なアニマであり、プシュコポンポス (魂の導き手) である。

それでは、ネルヴァルにとって、新生とは何を指すのだろうか? 文脈からすれば、自分の病気が始まった時を指すのだろうから、年譜に記したように、1841 年 (32 歳) の最初の精神錯乱発作をさすのだろう。32 歳から、既に夢や幻覚が第 2 の人生になっていたののだろうか? ネルヴァルは、本書で病気の時が一番快調であると記しているが、本当にそうだったのだろうか? 他の作品や書簡や他者の証言など全体を見ると、病気の悲惨さの方がかなり目につく。

ただ、ネルヴァルがこの「幻覚妄想状態」や「夢体験」を、新生であり第 2 の人生の始まりであると感じているのは事実であろう。ネルヴァルに限らず、病気は、死と再生、即ち新生のような面がある。そして、この新生面をどう生かすかは、本人・関係者・治療者次第であり、また各状況や運と縁にもよるだろう。

イ、二つの局面

夢と病気による新生の二つの相というのは、普通に考えれば、時間的な相や局面ということだろう。ネルヴァルの病気が、1841. 2. 20. 頃に始まるとすれば、第一の局面とはそれ以降のことを指すと考えられる。

第 2 の局面をいつにするかは、そんなに明確ではないが、病気の再発 (それも大きな再発) を手掛かりにするとすれば、1851. 9. 24. の墜落事故に (階段から落ち、これがより深刻で長期に渡る再発の原因となる) を指すのだろう。ネルヴァルは、この再発に関して「夢と人生」の第 1 部第 9 章の冒頭で「ある運命的・宿命的な状況が病気の再発を引き起こしたが、それによって再びこの奇妙で奇怪な夢や夢の続きが繋がることになった」と記している。そうすると第 1 の局面は、1841. 2. 20. からで、第 2 の局面は、1851. 9. 24. 以降のことを指すとなるが、夢の時間は、普通の時間と異なるので、この区分は参考にしておくだけでいいだろう。

もう一つの「二つの相」とは、文字通りの第1部と第2部を指すとしてもいい。「夢と人生」の構成は、結構複雑で、第1部が10章、第2部が6章、後メモラビリア(記憶すべき事柄)やオーレリア書簡がついたりしている。それらが、どうなっているかは、それらの章などを扱う中で少しずつ明らかにしていく予定である。

後、二つの相とは、善と悪、良い面と悪い面という分け方や、表面と深層という区分と言う形にもなりそうだが、この「二つの局面」が何を意味するかは、おいおい明らかになるだろう。

ウ、オーレリアについて

続いて、第1の局面の始まりとして、ネルヴァルの愛する人、オーレリアが出てくる。オーレリア(Aurelia)とは実在の人物ではなく、色んな人物の融合体とされているが、その内の何人かを紹介しておく。

[J. コロン(ジェニー・コロン)]

J. コロン(1808～1842)は、パリの女優で、ネルヴァルが熱を上げた女性で、この「夢と人生」を初め、ネルヴァルの幾つかの自伝的作品のモデルになっている。この「夢と人生」でも、大きな役割を占めることになる。ただ、ネルヴァルとの間に具体的にどういう関係があったかは、はっきりしない。

[ソフィー・ドース]

ソフィー・ドース(1805～1872)は、オーストリア大公妃で、ネルヴァルは、彼女の美しい姿を見た、ということをして「東方旅行記」のウィーンの記述の中で述べている。

[その他のモデル]

後は、亡き母のことや、ネルヴァルが各地で出会った女性のことがモデルの素材となっているし、想像上の女性や女神も取り込まれているかもしれない。

このように、オーレリアは、混合的相貌を持つ女性であるが、何と言っても主役になるのは J. コロンで、ネルヴァルのアニマと言ってもいい。ダンテやペトラルカが、ベアトリーチェやラウラを理想化したように、ネルヴァルは、J. コロンをそうした理想的な位階に置こうとしているのだろう。

[オーレリア(Aurelia)と言う名の起源]

オーレリアに代表される人物が、多様な女性たちから成るように、Aurelia という名の起源も複雑である。

まず挙げられるのはドイツ浪漫派の代表作家ホフマンの「悪魔の霊液」(分身現象を扱っている。オーレリアは、主人公メダルドゥスのあこがれの女性である)に出てくるオーレリアが挙げられるが、「ペルジナ」という脚本(メレスヴィル作。ネルヴァルが戯曲「コリッラ」を作る時参考にした)の中にも、オーレリアという名前が出てくる。

また、ネルヴァルは、ライン川の伝説で有名な「ローレライ(Lorely)」と l`Aurelia を同一視している。ネルヴァルには「ローレライ」と題する長編の紀行文があり、ローレライへの入れ込みは格別のものがあつたと思われる。

g、J. コロンとの恋愛物語

また、古代ローマの人は、蛾の蛹、幼虫状態をオーレリアと呼んだとのことであり、そうなるとオーレリアは「救いや開花の前状態」という意味も含んでくるようである。

またゲーテの教養小説「ウィルヘルム・マイスター」にもオーレリアが登場するし、モンパシエ内親王もオーレリアと呼ばれていた。

更には、前述のスウェーデンボリの「真のキリスト教」『記憶すべき事柄』の中に、Aurelia (蛹)が登場している。

[オーレリアが「夢と人生」の原題]

実を言うと、この「夢と人生」の原題は「オーレリア」なのである。この「オーレリア」の成立は、非常に複雑であるが、一時期、「オーレリアー夢と人生」という題になったことがある。この治療ゼミで「夢と人生」の題を選択したのは、「オーレリア」という言葉は、皆さんにはなじみが薄いような気がしたので「夢と人生」という題を採用したのである。

いずれにせよ、この「夢と人生(オーレリア)」は、このオーレリアという女性を巡る苦悩・葛藤・贖罪の物語であり、また彼女を中心とした夢と夢の物語と言える。またオーレリアを出発点とするアクティヴ・イマジネーションの世界であり、アニマ探究の旅と考えてもいいのである。

E. J. コロン(オーレリアの主要モデル)との恋愛・失意体験など

オーレリアという名前が登場した後、彼女のことや彼女巡る恋愛・失恋体験などを語りだす。事実はどうであれ、ネルヴァル次のように記している。

- ①自分が長く愛したオーレリアと呼ぶ女性は自分にとって失われた
- ②この出来事は私にとって大きな影響をもたらし、恐ろしい打撃となったが、死を選ぶことはしなかった。
- ③許しを得るのが不可能な程の過失を犯し、彼女に罰せられた自分は、卑俗な陶醉に身を任すしかなかった。
- ④快活とのんきさを装い、変化と気まぐれを求めて、世界を駆け巡った。
- ⑤自分(ネルヴァル)をもはや愛していないJ. コロンをプラトニックな愛で愛することを馬鹿らしいと自己分析する
- ⑥その後、イタリアの町でのカーニバルの酔い心地に、鬱は消え去る
- ⑦その町で、高名な女性(マリー・プレイル)と出会い、彼女に惚れてしまう
- ⑧マリーに手紙を出した後、偽りの恋だと気付く
- ⑨マリーと実際に会おうと、手紙の時のような熱烈な感情が湧いて来ず、彼女(マリー)をだますことになったが彼女はそれを許してくれた。

ア、J. コロンとの恋愛物語

ネルヴァルがJ. コロンに熱を上げだしたのは、はっきりしないがおそらく、1833～1834(25～26歳)の頃とされている。その頃、ヴァリエテ座に出演しているJ. コロンを見初めてプラトニックな

愛情を抱き、1835年には、彼女を讃えることを目的にした、豪華雑誌「演劇界」を創刊する(これで祖父の遺産を使い果たし、借金までこしらえた)。

J. コロンは、金髪、碧眼、眩しいような眼差し、優雅に微笑する口元、豊満な肉体を持つなかなかの美人だったとされている。

雑誌創刊の頃より、J. コロンとの関係が始まったとされているが、実際の所、どの程度の関係があったかは不明である。

ただ、J. コロンは、1838. 4月に、ルブリュスというフルート奏者と結婚し、ネルヴァルはかなりの精神的痛手を受けたようである。

しかし、「夢と人生」によれば、マリー・プレイエルのとりにしで仲直りしたとなっている。

その後、どういうことが二人の間に起ったかは明確ではないが、J. コロンは、1842. 6月、34歳の若さで他界する。

イ、ネルヴァルの言う「過失」や「罰」とは？(記憶は作られる)

ネルヴァルとJ. コロンの間にどれぐらいの関係があったかは、はっきりしないとしても、他の男性と結婚するわけであるから、二人の間は破局に陥ったと言える(しかし、破局と言える程の関係があったかどうか疑問と言えば疑問である)。

また過失や罪に関連して、ネルヴァルの友人ジョルジュ・ベルは「ネルヴァルがJ. コロンから結婚を迫られたが断ったこと」言っているが、一方では、ネルヴァルの方が結婚の申し込みをしたが、彼女の方が断ったという話になっている(振られるより振ったことにしておく方が、ネルヴァルにとっては心情としてはましだったのかもしれない)。

あるいは、この中間の説として、ネルヴァルは結婚の申し込みをしたが、その条件がJ. コロンを制限するようなものであったので、彼女が断ったこと、そしてネルヴァルは「(他の人との交際を制限するような)厳しい条件を出したことを過失だと考えた」という説もある。

また、アルセヌ・ウーセーによれば「ある時、ネルヴァルは大胆になり過ぎて、J. コロンにてひどく撥ね付けられ、それで彼女の大事なセーヴル焼の壺を壊してしまったこと」を挙げるが、これが事実だとしても、これをもって、許されないほどの過失とするのはかなり無理がある。

それから、最近の説として、二人の間には何もなかったというようなことも言われている。クロード・ビショワとジャン＝ポール・アヴィスの共著「ネルヴァル―パリ、放浪生活」という本には、ネルヴァルがありもしない熱愛を仲間たちに勝手に披露してただけに過ぎない、ということが書かれてある。真偽のほどはわからないが、こういう説があっても構わないと思う。

要するに、「記憶は作られる」ということで、何が事実・真実だったのかは、一つに纏められないということだろう。これは、小さい出来事だけでなく、大きな歴史上の事件でもそうしたことが起きる(聖徳太子非実在説は有名だが、それ以外にも信長の「叡山焼き討ち」や「南京虐殺事件」ですらその事実を否定する人たちもいるぐらいである)。

これは、臨床場面でもよくあることで、患者が最初語る病歴が途中で、そして治療の終わりぐら

いになるとかなりの部分が書き変わることがあることを治療者はよく経験する。

多分絶対の真実・事実などは存在せず、「一人だけが信じている個人的事実(真実)」 「ある集団内で共有される事実」「殆どの人に共有される普遍的事実」の三つぐらいに分かれるのだろう。そして、患者、特に精神病状態にある人は、この「個人的事実」「集団内事実」「普遍的事実」の三つの区別が出来ていないのであろう。妄想を持っている人が、患者と見做されてしまうのは、この個人的事実だけに振り回されたり、それを他者に押し付けたりすることなどによるのであろう。ただ、治療においてはまず患者の「妄想と呼ばれる個人的事実」に波長を合わせ、徐々に集団内事実や普遍的事実との擦り合わせを行っていくことになるのだろう。

ネルヴァルに話を戻すと、彼と J. コロンとの間に何が起きていたかあまり筆者には重要ではない。また、自分を悲劇の主人公に仕立て上げ、勝手に過失を犯し罰せられるべき罪人になったと思い込んだとしても(意識してそういうふりをしていたとしても)同様に重大ではない。

それよりも、ネルヴァルが「個人的事実」を出発点に豊潤な夢や想像力を披露してくれること、そしてそれを通じて、贖罪、浄化、死と再生、癒しへの道を指し示してくれることの方が大事なのである。

ウ、プラトニックな愛

プラトニック・ラヴという言葉は、現在全く流行らなくなり、そんな言葉を使うのも恥ずかしいような時代になってきたようだが、今一度このことを考えてみたい。

プラトニック・ラヴ(「肉体的欲望を伴わない精神的愛」)は、今までは概して「まだプラトニックな段階にとどまっている」とか「プラトニック・ラヴで我慢しておく」といった形で、セックスまでは至らない形の不十分な愛という捉え方をされてきた。ネルヴァル自身も「なんという馬鹿なことだ。もう自分(ネルヴァル)を愛してもいない女(J. コロン)を、プラトニックな愛で愛するなんて!」と述べている。

しかし、この「夢と人生」の中で語られるプラトニックな愛は文字通りの「プラトニックな愛」と考える方がいい。ネルヴァルは肉体関係を伴うにしろそうでないにしろ、いろんな愛の感情の様々な段階を体験してきたと思われるが、そうした愛の段階の自然な終極が、「愛の神秘的超越性」であるということである。従って、J. コロンを、ベアトリーチェ(ダンテの恋人)やラウラ(ペトラルカの恋人。どちらもプラトニックな愛の典型である)に仕立て上げたのも至極当然のことである。この「夢と人生」は、最後には、マリア信仰、イシス女神崇拜に至っていくのだが、J. コロンは、その出発点と言える。

エ、豊かな性と貧しい性

ここで、想起されることは、豊かな充実したセックスとは、プラトニックな愛が伴うものだということである。豊かな性とは、お互いが相手の魂や心身の存在を尊重し、性的営みにより、より深い親密感や相互理解が増し、安らぎや幸せに包まれ、余分な緊張感が消失し、お互いに感謝し合うと言った、素晴らしい業である。それは一種の神聖な儀式とも言える。

ウィニコットは、「豊かで満足した性行為の後では、両者とも一人であることに満足している。」という言い方で、人間の基本的健康条件である「一人でおれる能力」と豊かな性の関連を説いている。

[ある臨床例(貧しい性から豊かな性へ)]

ここで、更に筆者はある治療例を思い出す。ケースは、20歳の医学部の女子学生で、過食とリスト・カット、不登校などが主訴であった。彼女は、根底に、強烈なむなしさ、自己否定、深い孤独感、見捨てられ感、を持っており、それを埋めるために、衝動的にセックスに走るということを繰り返していた。それは当然、貧しいセックスでしかなく、行為の後、きまって自己嫌悪、不満足感がもたらされ、それは過食やリスカに結びつき、それでまた否定感情が強くなり、再び、貧しい衝動的セックスに溺れるということを反復していた。

筆者とのカウンセリングで、そのことに気づきだした彼女は、一時的に激しい抑うつを来したが、その後ある同級生の医学部男子学生と付き合い始めた。しかし、その男性は、すぐに関係を結ぼうとはせず、「お互い本当に愛し合って、相手に責任を持てる」ということを確認し合ってからにしよう」ということで、二人とも1年間は、プラトニックな愛で通した。その後は肉体的なことも含めてより親密な関係になり、豊かなセックスがもたらされた。

彼女の過食やリスト・カットも消失し、大学にも行けるようになり、何とか卒業し医師になった後、その彼と結婚し、今は二児の母となり、安定してきており、当初憎しみと恨みの対象でしかなかった、両親に対しても感謝と愛情の気持ちを持っている。

この例で感じさせられるのは、豊かな性に至るには、心の準備が必要であり、肉体と精神は不可分であるということである。まさに、「性」とは「心」＋「生」なのである。

そう考えれば、日常の臨床で出会う若き女性たちが如何に貧しい性体験しか持っていないことが行ってしまう。特に境界例や解離性障害の患者に多いのだが、彼女等の治療の大きなポイントになるだろう。

逆に、性を嫌悪し恐怖し過ぎる余り、愛し合っながら、セックスはおろか身体的接触も出来ないでいる、といった女性たちもいる。こうした形で悩んでいる女性も多いが、どちらも「プラトニックな愛」と「身体的愛情」を分けて考えることの悲劇でもあるし、両極端になってしまう人間の悲しい傾向なのかもしれない。

また、これは、女性だけの問題ではなく、男性の場合にも重大なことなのだが、これは、また機会があれば詳しく論じてみたい。

オ、躁的防衛

ネルヴァルは、過失の責を負った後、「卑俗な陶酔の内に身を投じ、快活と暢気を装った」と記しているが、これは「躁的防衛」を連想させる。躁的防衛とは、「喪失体験、罪悪感、抑うつ、不安感などを否認し躁的な状況になることを意味する。

大抵は、否定的な意味につかわれることが多いが、ネルヴァルの場合も含め、想像力をかきたて、

創造性を増し、新たな出発点になることもある。

h. ネルヴァルの旅

ア、ネルヴァルの旅行の全容

ネルヴァルは、失恋の後、「変化と気まぐれにうつつを抜かして、世界中を駆け巡った」と記しているが、ネルヴァルその時だけでなく、もともと旅行好きである。どのくらい旅行したのか、少し年表的に整理しておこう。

1834. 9～12 月 (26 歳)、南仏、イタリア旅行

1836. 7～9 月、ベルギー旅行

1838. 8～10 月、ドイツ旅行

1839. 10～1840. 3 月、スイス、ドイツ、ウィーン旅行

1840. 10～1841. 1 月、ベルギー旅行

1842. 12～1843. 12 月、中近東へ旅行

1844. 9～10 月、ベルギー、オランダ旅行

1846. 7～8 月、イギリス、ベルギー、ドイツ西部、旅行

1849. 5～6 月、ロンドン旅行

1850. 8～9 月、ドイツのヴァイマルへ旅行

1850. 11 月、この頃より、頻繁にヴァロワ地方を訪れる

1852. 5 月、ベルギー、オランダ旅行

1854. 5～8 月、ドイツ旅行

といった具合で、死に至るまで旅行ばかりし続けていたようである。どうも、ネルヴァルの人生を考えると、少しお金が出来ると旅に出て、すっからかんになって(それ以上に借金までして)帰って来て、その後文筆でまた稼いで旅行に出掛けるといった具合である。

ただ、ネルヴァルは単に旅行好きというだけでなく、優れた紀行文・旅行記を残している。ドイツ旅行を描いた「ローレライ」、オリエント(中近東)旅行の「東方紀行」、イタリアやヴァロワ地方への旅を中心とした「火の娘たち」といった素晴らしい作品を残している。彼の旅行記は、夢と幻想に彩られ、読者を否応なく引きずり込む不思議な魅力を持っている。

イ、旅とは何か？

旅は、閉塞性を打ち破り、新しい血と活力を与えてくれる。日常が紋切型というかステレオタイプ化した時、別の異空間に身を置くことで、新鮮な空気に触れ、心身や魂が生き返るのである。

だから、転地療法の意義がそこにあり、旅することで病が回復した例は枚挙にいとまがない。すぐ思い出すのは、深く関わっていたクライアントが自殺したという辛い目にあった、知人の臨床心理士がスイスに1年留学することで立ち直ったという例である。あるいは、四国お遍路でうつ病が改善した例も印象深い。

旅も、死と再生の一つと言えるのだろう。ただ、無闇に転地療法をしたからといって、良くなる

とは限らない。転地や旅によって、「生きる上での苦しみを受け止めていく」という姿勢が根底において生じなければ、治癒は難しいだろう。

ネルヴァルの場合はどうだったのか？これは、またこの「夢と人生」の解説の過程で明らかになっていくであろう。

i. ウィーンの恋(マリー・プレイエル)とのこと

ア、ネルヴァルの個人的記憶

再び「夢と人生」のテキストに戻るが、ネルヴァルは、J. コロンとの恋の痛手を癒すべく、旅に出かけ、イタリアでさる高名な女性と出会ったとなっているが、これは実はウィーンのこと、高名な女性とは美貌のピアニスト、マリー・プレイエルであることが判明している。まずはマリー・プレイエルとネルヴァルとの間に何が起きていたのかを「夢と人生」の中の記述で追ってみよう。

「もう自分を愛してもいない女をプラトニックな愛で愛するなんて、何と馬鹿げたことだ」

「他の女性たちとの恋愛を楽しもう。そうすれば、J. コロンとのことを忘れることができるだろう」

「イタリアのある町で祭りに酔って、鬱的な気分は吹き飛ばされた」

「(その勢いに乗って)自分はある高名な女性に夢中になり、求愛の手紙を書いた」

「彼女は、私の唐突な申し込みに驚いたようだが、一応受け入れてくれた」

「ただ、いさゝ彼女と会って愛の告白をしようとする、会話の中に自分の本当らしさが見いだせず、彼女や自分自身を欺いていることがわかり、それを彼女に告白せざるを得なかった」

「ただ、このような涙ながらの告白は、彼女の心を打ったようで、彼女は私を許し、我々の間には、より優しく確かな友情が結ばれた」

ここで、第1章が終わっているが、この部分を要約すると、「J. コロンとの辛い体験の次に新しい恋の機会に恵まれ、相手(マリー・プレイエル)もそれに応えてくれたが、実は彼女をも自分をも欺いていることがわかる。それでも彼女はそれを許し、より確かな友情(Une plus forte amitié)が結ばれた」ということである。

しかし、先にも述べたが記憶は作られるものである。ネルヴァルの個人的記憶はそうであったとしても、実際はどうだったのだろうか。

イ、資料によるマリー・プレイエルとネルヴァル

ネルヴァル事典によれば、マリー・プレイエル(1811-1876)は「ピアニスト。1831年、ピアノ製造業者、ジョゼフ・エチエンヌ・カミーユ・プレイエルと結婚するも、彼女の浮気の故に4年半後に離婚。ピアノの技量と美貌によって聴衆を魅了し、またベルリオーズ、ショパン、リストなど多くの愛人を持った。ネルヴァルは、1839-40にかけてのウィーン滞在中に知り合う。ネルヴァルはジャンからの推薦状をもらっており、大使館の夜会で芝居や文字当てゲームをした。その後、ネルヴァルは1840年末にブリュッセルで再会している」とのことである。

書簡も残っていて、ネルヴァルは彼女のことを、友人達や父に、手紙で「素晴らしく魅力に富んだ女性」と賛美している。

一方、プレイエルは、ネルヴァルを紹介したジャンナン宛に、ネルヴァルのことを「素晴らしい鄭重な小柄な若い方」と述べている。

これで、見ると熱を上げていたのはもっぱらネルヴァルの方で、プレイエルの方は何とも思っていないなかったのかもしれない。従って、プレイエルがネルヴァルの求愛を受け入れたこと、偽りの求愛であったことの告白を許したことはネルヴァルの偽記憶、又は創作だったことになりそうだが、筆者にとっては別にどうでもいいことである。先述したように「記憶は作られる」もので、筆者の関心は如何に記憶が形成されていくかの方に向かうからである。

ウ、記憶の解明とは?(ある臨床例)

記憶は作られるといったからと言って、「すべての記憶は曖昧なので、意味がない」ということにはならない。

たとえば、太平洋戦争にまつわる、慰安婦問題、731部隊の人体実験、集団自決問題などは、こうしたことやこれに類することを繰り返してはならないし、このことで多くの傷を負った人たちへの償いをどうするかという、すぐれて今日的な課題がある故に、うやむやにすべきではなく、どこまでこの「事実」が解明され、共有されるかが大事な問題である。これにより、われわれは再び同じ過ちを繰り返してはならないという決意を固めるのである。

ただ、全てのことに關して、記憶の解明に固執する方がいいかどうかとなると別問題である。ここでは、一人の患者の例を引こう。ある美しいうら若き女性が「催眠をかけられてレイプされた」と訴えていたが、はっきりした証拠がなく、周りは彼女を被害妄想扱いした。そこで、彼女はいろんな精神科医やカウンセラーを訪れたところ、やはり妄想扱いされたりし、たまに真剣に話を聞いてくれる治療者がいたが、それでも最後は、「もうそんなことに固執しないで忘れたら」と言われることが多く、失望の体験を重ねていた。

そういう彼女と筆者は出会うことになった。筆者は、話を一応聞き終えた後、彼女の要望を聞くと「私の記憶を調べてもらって、真実が何であるか解明してほしい」ということであった。ただ、そのうちに彼女は「催眠レイプが確実であり、それを立証してほしい。先生は精神科医でも臨床心理士でもあるので、先生が認めてくれたら全部が信じる」ということを言って来た。

筆者は「いくら私であっても、日本では証拠証言が優先される。でもその証拠集めには全面的に協力したい。催眠レイプなどというひどい行為は許されるべきではない」と述べて、彼女の記憶の解明と共に証拠集めに努力を集中しようとした。ただ、彼女には「下手に、催眠レイプのことを言うと被害妄想と間違えられるかもわからないのでこの証拠証言集めは慎重にやった方がいい」と言っておいた。

その後、彼女は、証拠証言がなかなか集まらないので、いらいらしたりしていたが、筆者が「正しいことでも、なかなか分かってもらえない時がある。忍耐強く続けよう」と勇気づけたりしておいた。また、焦って相手を訴えろと言った時、今の状態で裁判に持ち込めるか勝訴の見込みがあるか、といったことを調べるために弁護士を紹介したりした。結果的にはもちろん裁判は無理という

話だったが、筆者には紹介してくれたことだけでも感謝していた。

このように証拠証言集めをしながら、記憶の解明に努め続けていたところ、ある時、彼女から「先生、もういいです。多分私の思い込みだと思います。それに、今、新しい彼が出来てそちらの方に熱心で前のことはもういいし、忘れてしまいたいです」との話が出た。筆者が事情を聞くと「最初先生が熱心になってくれたのが嬉しく、またずっと真実の解明と言うことについて熱心応援してくれた。先生は私を被害妄想扱いしなかったし、また忘れなさいとも言わなかった。むしろ私以上に熱心に真実を解明しようとの熱意を見せてくれた。私はそれで自分が受け入れもらえているという安心感がもらえ、自分にも自信が湧いてきた。そんな風にしていたら、何となく生活も前向きになってきて気が付いたら彼が出来て、今幸せだしもう前のことはいいんです。先生にはこんなに熱心になってくれて取り下げるのは申し訳ないんですが」と言ってきた。

そこで面接は終わりに向かったが、彼女にとっては最初は「記憶や真実の解明が必要であったのだが、理解者が出来日常生活が幸せになると、そう必要でなくなったということ()も知れない。

結局、記憶や真実の解明は、必要性がある時にすればいいということなのだろう。

j. 「夢と人生」(オーレリア)第1部第1章の要約

マリー・プレイエルのことで、この「夢と人生」の第1部第1章は終わり、筆者の拙文もこれでひとまず終える。

ただ、筆者の雑文はあちこちに飛んで何を言いたいのかわからなかったかも知れないので、一応の要約をしておく。

ネルヴァルの言いたかったことを箇条書きにしてみる

- ①夢は第2の人生である
- ②睡眠の最初は死のイメージだが、徐々に精霊の世界が開かれてくる
- ③スウェーデンボリ、ダンテ、アプレイウスという人間の霊魂の研究者たちに倣って、自分も、精神の神秘の裡に起きた長い病気の印象を綴ってみよう
- ④ただ、病気と呼ぶに足らずは、自分はこの間、無限の想像力を発揮し、一番調子よかった。
- ⑤この「新生」は私にとって二つの相を取った
- ⑥第一の相を今から記すが、それはオーレリアという女性のことであり。私が長い間愛したオーレリアは私にとって失われてしまった。
- ⑦その痛手を癒そうとして、旅をした
- ⑧旅先で、マリー・プレイエルという女性に偽りの恋をしたが、マリーはそれを許してくれ、マリーとの間にいつかの友情が確立した。

といったことが、第1章の要約である。

k. 筆者の解説と連想の要約

このネルヴァルの素晴らしい記述に対する私の連想は、まことに貧弱で粗雑なもので恥ずかしい限りだが、それでもこの「夢と人生」と格闘することによって大いなる勉強ができ、特に臨床力が

少なからずアップさせて頂いたような気がする。以下、筆者なりの連想の要約を記す。

「夢と人生」解説の目的、ネルヴァルの紹介、夢は第2の人生、症状も第2の人生、夢の真実と嘘、正夢・逆夢、嘘と真実は紙一重、入眠時の様相とリンボ(辺獄)、眠りと死、不眠症、ネルヴァルの夢への執着の強さ、夢自我、冥界くだりと魂の探究者たち(スウェーデンボリ、ダンテ、アプレイウス)、浄化・下剤・告白の意味、地獄巡り、黄金のロバと境界例、夢と病的体験の記述の重要性、間接化の治療的意味、間接化・つながり・安心の良循環、病気と健康(正気と狂気)、ネルヴァルの病気とは?病名の治療的利用、病気の価値と健康の価値、新生、二つの相、オーレリアとは?J. コロンについて、J. コロンとの恋愛・破局、過失・罰とは?記憶は作られる、プラトニックな愛、豊かな性と貧しい性、貧しい性に苦しむ患者たち、豊かな性と愛に到達できた女性患者の例、躁防衛、旅の治療的意味、マリープレイエルとのこと、記憶の解明とは?記憶の解明作業を通じて救われた妄想患者の1例、

といったことであるが、以上のテーマはこれからももっと深める必要はあると思われる。

4. ネルヴァル、「夢と人生」の魅力

これについては、私も正直よくわからない。ただ、私が40年以上も熱を上げているのはそれなりに理由があるのだろう。以下、その理由を自由連想風に探ってみると、

- ・夢に関する記述が多い。夢好きにとってはたまらない存在。
- ・文章が夢想的でロマンチックである。
- ・彼の文はどこを目指しているのかわからないような、その場の思いつきのような感じでどこに連れて行かれるのかわからないが、それが又ワクワクした魅力を呼ぶ。
- ・彼のフランス語は、流れるような甘美な純粹さに溢れた素晴らしい音楽のような味わいを持つ。フランス語に触れだした20歳の頃に聞いた、ネルヴァルの朗読レコートで、「Le reve est une seconde vie」(ル レーヴ エッチュヌ スゴ ンド ヴィ)(夢は第2の人生である)で始まるくだりにうっとりしたことを今でも思い出す
- ・扱っている内容が、精霊、冥界下り、死と再生、カバラ、宇宙との交感など、超現実なところも惹かれる所以である
- ・ネルヴァルの文章はわかりにくいし、意味不明で謎だらけである。。しかし、このわかりにくさ・謎がたまらない魅力で、一読者としては、どうしても謎解きに駆り立てられてしまう。いわば、魅力的な夢を前にして、夢分析を施したくなってしまう治療者の心境だろうか?
- ・旅やアニマの探究、音楽や絵画の造詣も深いこと
- ・フロイトやユングといった無意識の探究者たちの先駆を成す(いずれ、ネルヴァルとフロイト、ネルヴァルとユングについては論じる予定である)
- ・心理学、精神医学を学ぶものにとっての格好のテキストである
- ・夢の中の感情や幻想を表現することに卓越している
- ・心の病の治療の試みを素晴らしい作品にしている

- ・美学の高みと人間的知性の深遠さを感じさせる
 - ・ほとんど捉えることが不可能なような微妙な感触を把握し明るみに出そうとしている
 - ・ネルヴァルは詩的トランスともいうべき状態のなかで、あたかも非時間的な世界に参入する予言的精神を持ち、「真の絶対」に到達しようとしている
 - ・魂の様々な転調を限りなく追及し続けている
 - ・イシスやオルフェウス等の神話を新しく作り変えている
 - ・土地に力と想像性を与え、魔法の地理学のようなものを作っている
- といった点だろうか?しかし、ネルヴァルの魅力はこれからじっくり掘り下げるつもりである。

[追記]

今回は、ほんのさわりだけで終わったが、いずれ機会を見て本格的に「治療者ネルヴァル」を探求していきたいと思っている。